

離島障害者支援施設の

入所者の高齢化・重度化への対応課題と今後の方向性

都道府県： 沖縄県

会員施設名： 障がい者支援施設ハーモニー

発表者氏名： 石本 俊介

I. 研究目的

離島の障害者支援施設における現状を把握し、持続可能な運営支援の在り方を明らかにすること。

- 現状課題の抽出：入所者の高齢化・重度化に伴う対応課題の特定
- 施設機能の再定義：当初の自立支援モデルから、現在の「終の棲家」としての実態への変化を分析

II. 研究方法

- ①入所者データの経年比較
- ②属性：入所者の年齢層分布、障害支援区分、重複障害の判定状況の集計
- ③入所期間・経年推移の調査：平均年齢の推移及び20年以上の長期入所者の割合
- ④業務実態の質的調査：現場で発生している医療的処置や身体介護の変化

III. 研究結果

- ①高齢化の加速
平均年齢が65歳前後の上昇
加齢に伴う疾患（糖尿病・心疾患・嚥下機能低下）が増加
- ②障害の重度化・重複化
障害支援区分5・6が85%を占める重複障害が34% 知的障害併用が30%
- ③長期入所実態
現利用者の18%が20年以上生活を継続しており、施設が「終の棲家」となっている。

IV. 分析・考察

- ①施設の役割が変化している
開設当初の「身体障害者の生活支援」から現在は「高齢者施設+医療的ケア施設」の生活が強まっている。⇒支援モデルの再構築が必要
- ②医療・介護ニーズの増大
胃薬管理、喀痰吸引、服薬管理など「医療的な処置」と「身体介護」が日常化し、実態は、医療型高齢者施設に近い機能を包含している。
- ③今後の方向性
医療対応の能力の組織的強化
地域医療ネットワークの再構築
「生活者」としての尊厳

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

障害者支援施設への AI 導入によるサービス向上

～現場の事務的業務の効率化・簡素化による直接支援の充実～

都道府県：兵庫県 会員施設名：社会福祉法人 希望の家グリーンホーム

発表者氏名：大浦 理紗、鈴川 勝久

I. 研究目的

2040 年、2050 年の介護職の深刻な担い手不足が予測されている。幸い、当法人は毎年新卒採用を 5 人～8 人程度の確保ができていますが、この状況が今後も継続できるか不透明である。多くの施設では不足人材を外国人（技能実習生等）などで補っているが、一部ではその確保も厳しくなっている。

こうした現状を踏まえ、将来に向けた対策として、令和 7 年度から AI を導入し、現場の事務的業務の効率化・簡素化を図り、その業務負担の軽減した人員を直接支援の人員に充当することでサービスの充実を努めた。

今回の発表は昨年度から AI 導入に取り組んだ経過と事例を報告すると共に今後の対応を報告するものである。

II. 研究方法

① AI 導入方法

利用者との会話をスマートフォン（以下「スマホ」という。）で聞き取り、文字化し、ケース記録に記載することを基本にし、それ以外は、一括職員入力とする。聞き取りは、普段の日常会話、各種行事の感想、個別支援計画のアセスメント項目、満足度調査項目等、1 年を通して計画的な会話を行うため、スマホは、全職員一人 1 台を常に所持する。なお、施設の全館で Wi-Fi 受信を可能とするために追加工事を行う。

② AI 導入の業務対象範囲

事務的業務の中で、どの項目を AI 導入の対象にするかを検討した結果、生活介護、看護業務、栄養マネジメント業務、リハビリ業務についての事務的業務として、現在利用の支援ソフトのすべてを対象として、さらに個別支援計画、アセスメント、個別の支援費各種加算にかかる項目、ISO9001 で実施している様式（利用者満足度調査、予防処置、是正処置等）等 88 項目の領域も対象とした。

③ AI 導入内容

職員と利用者の会話をスマホで録音し、文字化したものを AI が文章を生成し「ケース記録」等に記載される。その文章を職員が福祉用語や変換ミスがないか確認する。確認された文章が、AI によって次の 3 ヶ月毎のまとめ、中間評価、

終了評価、満足度調査及び次期個別支援計画書、検討書となる。なお、利用者との会話の中に個別支援計画のアセスメント項目や満足度調査項目等を会話中で自然に聞き出せるように、職員用の「会話ポケットブック」を作成し携帯している。

④ AI 導入にあたっての職員研修

職員の AI に対する抵抗感の排除、全員の AI 導入への意識の統一及び基礎知識の習得のための研修を実施した。まず、幹部職員への福祉 DX 専門研修を実施し、幹部職員が講師となり、職員全員への研修を行った。また希望する職員及び新任職員へ「IT パスポート」研修の実施し、IT 活用の構築に向けた体制に取り組んだ。

⑤ AI 導入後のデーターの分析・活用

AI 導入のクラウドでの顧客管理のデーター蓄積により、各種データーの抽出が可能となった。そのデーター解析により、業務の効率化、サービスの充実強化に活用が可能となり、さらなる業務改善に向けた取り組みが可能となる。

Ⅲ. 研究結果

- ① 当初 3 か月程は、職員 5 台のスマホと従来の支援ソフトを併用して実施していたが、職員間に、スマホ利用の差が生じ、再三打ち合わせを実施した。3 か月ごとのまとめを併用記録としたが、徐々にその差が解消し、9 月末のまとめ及び中間評価では、AI による記録となった。その間に、記録に誤字・脱字が多くみられたが徐々に解消された。
- ② AI の導入により、記録の入力や書類の入力の時間が減り、空いた時間を直接介護の時間にあてることができ、日中活動やサービスの質の向上につなげることができた。

Ⅳ. 分析・考察

AI 導入により、記録業務や計画書作成に費やす時間が物理的に削減されただけでなく、「記録のために手を止める」「記憶を呼び起こして文章を考え入力する」といった手間が大幅に軽減された。また音声入力や AI による自動生成が、職員の事務作業に対する苦手意識や手間を払拭し、本来の専門職としての業務（直接支援）のサービスの充実に努めた。今後、少子高齢化がさらに加速する 2040 年に向け、当法人が「選ばれる施設」であり続けるためには、このデジタル基盤を基に、サービスの質の向上を目ざす必要がある。